

宮澤賢治全集

12

筑摩書房

宮澤賢治全集第十二卷

昭和四十三年十二月二十五日初版第一刷發行

著者 宮澤賢治

發行者 竹之内靜雄

發行所 株式會社 筑摩書房

東京都千代田區神田小川町二ノ八
電話東京(二九一)七六五一(代表)
振替 東京 四一 二二三
郵便 番號 一〇一 一九一

印刷・精興社
製本・美行製本

目次

農民藝術概論	七
農民藝術概論綱要	一〇
農民藝術の興隆	一九
修學旅行復命書	三三
句稿	三〇
國語綴方帳	三六
手帳より	四七
石川善助を弔む	一〇〇
浮世繪版畫の話	一〇一

浮世繪廣告文 草稿	二五
歌集「寒峽」紹介文 草稿一、二	二六
エスペラント詩歌稿	二〇
「旅人のはなし」から	二四
復活の前	二八
(峯や谷は)	三三
メモその他	三三
腐植質ノ無機成分ノ植物ニ對スル價值	三三
レコード交換規程	三六
肥培原理習得上必須ナ物質ノ名稱	三六
植物ノ生育ニ直接必要ナ因子	三八

土壤要務一覽	一四
（集會案内）	一八
（講義案内）	一九
稻作施肥計算資料	一九
昭和八年度水稻施肥控 他	一六
精白に搗粉を用ふることの可否に就て	二〇
肥料用炭酸石灰に就て	二九
畑作用炭酸石灰ができました	三三
貴工場に對する獻策	三三
法華堂建立勸進文	三六
歌 曲	三七

[illegible]

宮澤賢治全集 第十二卷

農民藝術概論

序 論

……われらはいっしょにこれから何を論ずるか……

農民藝術の興隆

……何故われらの藝術がいま起らねばならないか……

農民藝術の本質

……何がわれらの藝術の心臓をなすものであるか……

農民藝術の分野

……どんな工合にそれが分類され得るか……

農民藝術の諸主義

……それらのなかにどんな主張が可能であるか……

農民藝術の製作

……いかに着手しいかに進んで行ったらいいか……

農民藝術の産者

……われらのなかで藝術家とはどういふことを意味するか……

農民藝術の批評

……正しい評価や鑑賞はまづいかにしてなされるか……

農民藝術の総合

……おお朋だちよ いっしょに正しい力を併せ われらのすべての田園とわれらのすべての生活の一つの巨きな第四次元の藝術に創りあげようでないか……

結 論

◎われらに要るものは銀河を包む透明な意志巨きな力と熱である

農民藝術概論綱要

序　　論

……われらはいっしょにこれから何を論ずるか……

おれたちはみな農民である　ずるぶん忙がしく仕事もつらい
もっと明るく生き生きと生活をする道を見付けたい

われらの古い師父たちの中にはさういふ人も應々あった

近代科學の實證と求道者たちの實験とわれらの直觀の一致に於て論じたい

世界がぜんたい幸福にならないうちは個人の幸福はあり得ない

自我の意識は個人から集團社會宇宙と次第に進化する

この方向は古い聖者の踏みまた教へた道ではないか

新たな時代は世界が一の意識になり生物となる方向にある

正しく強く生きるとは銀河系を自らの中に意識してこれに應じて行くことである

われらは世界のまことの幸福を索ねよう　求道すでに道である

農民藝術の興隆

……何故われらの藝術がいま起らねばならないか……

會つてわれらの師父たちは乏しいながら可成樂しく生きてゐた

そこには藝術も宗教もあった

いまわれらにはただ勞働が生存があるばかりである

宗教は疲れて近代科學に置換され然も科學は冷く暗い

藝術はいまわれらを離れ然もわびしく墮落した

いま宗教家藝術家とは眞善若くは美を獨占し販るものである

われらに購ふべき力もなく又さるものを必要とせぬ

いまやわれらは新たに正しき道を行きわれらの美をば創らねばならぬ

藝術をもてあの灰色の勞働を燃せ

ここにはわれら不斷の潔く樂しい創造がある

都人よ來つてわれらに交れ世界よ他意なきわれらを容れよ

農民藝術の本質

……何がわれらの藝術の心臓をなすものであるか……

もとより農民藝術も美を本質とするであらう

われらは新たな美を創る 美學は絶えず移動する

「美」の語さへ滅するまでに それは果なく擴がるであらう

岐路と邪路とをわれらは警めねばならぬ

農民藝術とは宇宙感情の 地人 個性と通ずる具體的な表現である

それは直觀と情緒との内經驗を素材としたる無意識或は有意の創造である

それは常に實生活を肯定しこれを一層深化し高くせんとする

それは人生と自然とを不斷の藝術寫眞とし盡くることなき詩歌とし

巨大な演劇舞踊として觀照享受することを教へる

それは人々の精神を交通せしめ その感情を社會化し遂に一切を究竟地にまで導かんとする
かくてわれらの藝術は新興文化の基礎である

農民藝術の分野

……どんな工合にそれが分類され得るか……

聲に曲調節奏あれば聲樂をなし 音が然れば器樂をなす
語まことの表現あれば散文をなし 節奏あれば詩歌となる

行動まことの表情あれば演劇をなし 節奏あれば舞踊となる

光象寫機に表現すれば靜と動との 藝術寫眞をつくる

光象手描を成ずれば繪畫を作り 塑材によれば彫刻となる

複合により劇と歌劇と 有聲活動寫眞をつくる

準志は多く香味と觸を伴へり

聲語準志に基けば 演説 論文 敎説をなす

光象生活準志によりて 建築及衣服をなす

光象各異の準志によりて 諸多の工藝美術をつくる

光象生産準志に合し 園藝營林土地設計を産む

香味光觸生活準志に表現あれば 料理と生産とを生ず

行動準志と結合すれば 勞働競技體操となる

農民藝術の(諸)主義

……それらのなかにどんな主張が可能であるか……

藝術のための藝術は少年期に現はれ青年期後に潜在する

人生のための藝術は青年期にあり 成年以後に潜在する

藝術としての人生は老年期中に完成する

その遷移にはその深さと個性が關係する
 リアリズムとロマンティズムは個性に關して併存する
 形式主義は正態により標題主義は續感度による
 四次感覺は靜藝術に流動を容る
 神祕主義は絶えず新たに起るであらう

表現法のいかなる主張も個性の限り可能である

農民藝術の製作

……いかに着手しいかに進んで行つたらいいか……

世界に對する大なる希願をまづ起せ

強く正しく生活せよ 苦難を避けず直進せよ

感受の後に模倣理想化冷く鋭き解析と熱あり力ある綜合と

諸作無意識中に潛入するほど美的の深と創造力をはかる

機により興會し胚胎すれば製作心象中にあり

練意了って表現し 定案成れば完成せらる

無意識即から溢れるものでなければ多く無力か詐偽である